

## 第 55 回リグニン討論会概要報告

第 55 回リグニン討論会世話人  
京都大学大学院農学研究科 高野俊幸

日本木材学会、紙パルプ技術協会、他 4 学会の共催で、第 55 回リグニン討論会を、2010 年 10 月 20 日（水）、21 日（木）に、京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールにて開催いたしました。今回は、京都大学大学院農学研究科森林科学専攻生物材料化学分野で担当いたしました。その概要につきまして、簡単にご報告させていただきます。

今回の討論会の参加者数は、一般：90 名、学生：36 名の計 126 名でした。例年に比べて、学生参加者数の減少が目立ちましたが、一方で、企業関係の参加者の若干の増加もみられました。主催者側としては、討論会の日程を京都三大祭りの一つである時代祭の前に設定し、学生参加者数の増加をねらったのですが、目論見がはずれてしまいました。前者の傾向につきましては、今後の動向を見極める必要があります。また、後者の傾向につきましては、バイオマスとして、企業の方がリグニンに興味を持ちつつあることを示唆しているのかもしれない。

今回の討論会の発表は、口頭発表：30 件、ポスター発表：20 件、特別講演：1 件で、ほぼ例年並みの件数がありました。なお、今回の討論会では、ポスター発表アピールを廃止し、口頭発表の発表時間を 1 分延長し、（講演 14 分、質疑 5 分、交代 1 分）で行いました。

口頭発表につきましては、1 日目に、細胞壁形成に係る遺伝子の解明、高機能微生物によるバイオリファイナリー、リグニン分解菌によるバイオレメディエーションなどの生化学関係の発表、2 日目に、リグニンモデル化合物を用いた各種反応（電極反応、イオン性液体中の反応、パルプ漂白段における反応、熱分解など）における反応性、単離リグニンを用いた新規な材料（複合ゲル、エポキシ樹脂など）などの化学関係の発表が行われ、活発な討論がなされました（右写真参照）。詳細につきましては、割愛させていただきますが、基礎から応用まで幅広く研究展開されている印象を受けました。今回の討論会の発表が、今後のリグニンの有効利用に向けての一助になることを期待するところです。



ポスター発表につきましては、私ども主催者の会場サイズの見込みの甘さもあって、非常に贅沢なポスター発表会場になってしまいましたが（右写真参照）、逆に、参加者の皆様には、非常なご好評をいただきました。2日目のお昼休み後に60分間討論を行いました。当初、主催者側としては、“会場が閑散するかも？”と危惧しておりましたが、徒労に終わり、活発な討論がなされたようです。



特別講演は、1日目の最後に、日本製紙ケミカル株式会社の西盛嘉人先生に、「リグニン利用の現状と将来展望」の講演タイトルでご講演をいただきました（下写真参照）。先生のご講演では、（1）リグニンスルホン酸塩とは？（2）リグニンスルホン酸塩の利用状況と特徴、（3）リグニンスルホン酸塩の主な用途、（4）リグニン利用の将来性と課題の4項目についてお話がありました。リグニンスルホン酸塩は、最も重要な工業リグニンであり、リグニンを研究する者であれば熟知しているはずなのですが、先生のご講演は、“知ってそうで知らない話”の連続で、リグニンスルホン酸塩を見直す良い機会になりました。（私だけでなく、多数の参加者から、そのようなお話を受けました。）今後のリグニンスルホン酸塩の研究の新展開に期待したいものです。



リグニン討論会では、例年、2日目終了後、日本木材学会の研究会と共催で、若手の会（宿泊付き）を実施しております。今回は、バイオマス変換研究会と共催で、2010年10月21日（木）に、関西セミナーハウスにて、若手の会を実施しました。21日晩のバイオマス変換研究会主催の講演会では、京都府立大学の宮藤先生、森林総合研究所の山田先生にご講演をいただきました。講演会は、能舞台で行われ（右写真参照）、参加者の方（一般：18名、学生：21名の計39名）にはご好評をいただきました。宿泊された参加者は、一般：12名、学生：13名の計25名で、真夜中を過ぎても、飲み明かし、懇親を深めました。若手の会は、これまでも、将来



のリグニン研究者世代の輪を築く上で重要な役割を果たしてきましたが、その意味で、これからも続けていきたいものです。

来年の第56回リグニン討論会は、2011年9月15日（木）、16日（金）（現在、日程調整中ですが・・・）山形大学農学部（鶴岡市）で開催される予定です。そちらも奮ってのご参加をお願いいたします。最後になりましたが、本討論会を主催するにあたりお世話になりました関係各位の皆様（参加者の皆様を含めて）に、感謝申し上げます。

以上